「第３８回全国中学生人権作文コンテスト鹿児島県大会」

【最優秀賞（鹿児島地方法務局長賞）作品】

「僕」という人間

鹿児島市立甲東中学校　３年　山城　英眞

僕には先天性の障害がある。そのため，僕がいつも考えることは周囲の友人に受け入れてもらえるかどうかである。

今の中学校には同じ小学校からの友人がたくさんいる。そのおかげで，他の小学校から入学してくる人たちとの関係作りに悩んでいた僕と周りをうまく繋いでくれた。

そんな僕も三年生になり，あと数か月すれば，友人に恵まれた今の環境を離れ，新たな世界へ飛び込まないといけない。そこで，自分の居場所を作っていかなければならない。今後，新しい人たちと出会って，僕について一から説明をして理解を得なければならないのだろうか。そんな自分について考えてみようと思う。

僕には，言語障害がある。構音障害といって，発音が聞き取りにくいらしい。しばらくすると，慣れてきたから少しはわかると言われる。時間をかければ，耳慣れてもらえるということかもしれない。あまりにも通じないときには，連想ゲームのように関連ワードで音がよく伝わる言葉を順に並べて伝えている。

また，顔面神経マヒがある。笑いたいとき怒りたいとき，僕の顔はずっと無表情なので何を考えているかわからないと思われることが多いだろう。そこで，笑いたいときは大声でおもいっきり笑い，怒りたいときは，「怒っているぞ」と声に出すようにしている。マヒは，咀嚼するのにも影響し口を閉じてできない。だから，食べる時は口の前に手を置いて，口の中が見えて，人に嫌な思いをさせないようにしている。

他に，四肢筋力も低下している。手に力が入りにくく，ペットボトルのふたを開けるのに時間を要したり，走るのがとても遅かったりする。体育大会や持久走大会など，クラス対抗の競技で，僕が遅いばかりにクラスに迷惑をかけていると申し訳なくて仕方がない。日常生活においても，僕は動作が緩慢である。周囲より先に動き始めてはいるのだが，みんなに追いつかれてしまい，結局は最後になり，周囲を待たせてしまうことになる。

僕は，障害があることを解っているつもりであったため，少しでも工夫して，みんなの中で活かせてもらえるように，みんなの中の一人として見てもらえるように努めているつもりである。それでも，まだまだ足りないところがあるのか受け入れてもらえないと感じる事も多々あり，苦しいと思うことがある。

両親に言わせると，それは当然らしい。

「人間は，個性が異なるものの集まりであるが，あまりに個性が違って異質であると思われると，なかなか受け入れられないんじゃないのかな。でも，あなたに障害があるのは事実であって，それは一生なのだから強くならなきゃ，これから先，生きていけないよ。」「『俺もあなたたちと同じ人間ですよ』と言い返しなさい。」

しかし，僕には，言い返せない。言い返せるだけのものが今の僕にはないと思う。だから，受け入れてもらえないと嘆き悲しんで立ち止まっているより，前に進んで同じ人間だと認めてもらえるように強くなりたいと思う。

ところで，時々「普通」という言葉を耳にすることがあるが，ふと考える。僕は「普通」ではないのか。いや，僕は生まれた時から今の「僕」なのだから，これが「普通」だ。ただ残念ながら狭い判断基準で「普通」とかそうではないとか決めてしまっているのではないだろうか。世の中にはさまざまな人間がいる。だから，「普通」「普通ではない」という基準はだれにも決められないのではないのだろうか。

生まれて十五年，メビウス症候群という難病と，それによる障害と僕はずっと付き合っている。切り離したくても切り離せない一生の相棒である。まず僕自身が自分の一部である相棒を受け入れ，相棒込みでみんなに僕という人間を理解してもらいたい。そのために，臆することなく自分について僕の相棒について，自分から，みんなに伝えていけるように自分を成長させていこう。中学卒業を控え，新しい環境へ踏み出すことに不安と期待に満ちている僕の今の気持ちだ。

僕の座右の銘は，金子みすずさんの詩「わたしと小鳥とすずと」の中の一部である。

「みんなちがって，みんないい。」

僕は，皆と同じ今を生きています。

僕は皆と同じ人間です。